

特集：パーソン・センタード・セラピーの展開

深い関係性のセラピー Working at relational depth の事例文献を読む

関西大学人間健康学部 中田 行重

要約

深い関係性 Relational depth やそのセラピー Working at relational depth がどのような体験なのかについては、Mearns & Cooper (2005/2018) の著書しか読んでいない多くのセラピストにとってはその著書の中の事例だけ知らない。しかし、ほかの研究者がどのような事例を想定しているかを知ることによって、深い関係性のセラピーについて、より偏りの少ないイメージづくりを目指すことが出来る。本論文は、文献に掲載されている事例を幾つか拾い上げ、著書的事例や定義と異なる特徴を探るものである。それら文献事例の特徴として、①自他の融合、②CI-Th という関係の枠組みの溶解、③CI との関係に居られることへの感謝、の3つがあることを見出した。

キーワード：深い関係性、Working at relational depth、定義、事例

I. Working at relational depth にはどのような事例があるのか、を知る意義

深い関係性での出会いによるセラピー working at relational depth (以後 WRD) はロジャーズ後の対話系パーソン・センタード・セラピー (Person-centered therapy, 以後 PCT) の発展の一つである。WRD を決定的に有名にしたのはその著書であり、PCT のもつ深い可能性を、PCT のセラピストに伝えた (他学派のセラピストは読まないだろう)。著書は初版 (2005) と第2版 (2018) があり、日本でもその翻訳本 (2021) によって注目されるようになっていく。その中でも特に事例は強い印象を与える。

ところが、事例がそれほど強い印象を与えるためか、読者としてはあれくらい強烈的な展開でないと WRD と言えないのではないか、と思ってしまうのではないだろうか。そこで、定義を見てみようとする、明確に「定義」として書いてはいないが、Knox (2013) や Wiggins

(2013) が WRD に関する研究を行う上で初版 (2005) の次の部分を深い関係性 (relational depth, 以後 RD) の定義として述べているところを見ると、WRD 研究者の中では、おそらくその部分が定義として共有されているのだろう。

「クライアント (Client, 以後 CI) との深いふれあいと関わりの中で、他者に対する高いレベルの共感と受容を同時に一貫して経験し、非常に透明性の高い状態で他者と関わる感覚。この関係においては、CI は自分 (セラピスト) からの共感、受容、自己一致を明確にあるいは何かしら感じている、と Th には感じられており、CI 自身も完全に一致していることが Th には感じられている」(2005, p.36)。第2版でもほぼ同じ内容が p.105 ~ 106 (翻訳, 2021) に記されている。

しかし、この定義を読んだだけでは、読者は自分が Th として関わった事例が WRD なのかどうか分かりにくいのではないか、と思われる。おそらく、内面の主観的な体験の現象が概念化

されて世の中に知られていく際にはこのような段階を経ていく場合があるのであろうが、WRDやRDはその過程にあるのであろう。読者にとってその分かりにくさがあることはWRDやRDという概念を専門用語として使い始めたMearnsも感じていたのか、これらの語を初めて用いた論文(1996)にも、「WRD全般のフィーリングを読者に伝えるために」という文言を挿入して、ThやClの体験報告をまとめて記述している。

本論文でも以下、初版が出てから第2版が刊行されるまでの間に刊行されたWRDについての研究書 *Relational depth: New perspectives and developments* (Knox, Murphy, Wiggins, & Cooper (Eds.), 2013) に掲載された3つのWRDの事例を紹介するが、この著書でも第1章に4つの事例が掲載されている。序論 introduction (p.7) には、「第1章は本書の後半に提示する研究や理論のための礎石である。Rogersが自分の経験で得た知識から業績を作ったように、本書の第1章の事例が、RDを経験した読者にとって自分のその経験を結びつけるポイントとなることを願っている」と書いている。これもやはり、上述のMearns(1996)と同じく、どういう現象なのか定義しにくいので事例からフィーリングで感じとって欲しいという思いをこの著者らも感じているという事情があるのではないか、と思われる。なお、第2版の著書の3事例のうち、2つはMearnsによるものであるが、ここに掲載されるのはいずれもMearnsのものではない。Mearns以外のWRD研究者はどのような事例をWRDの事例と捉えているのかを考えることで、WRD研究者で共有されているWRD/RDイメージを捉えてみたい。

II. *Relational depth: New perspectives and developments* (Knox, Murphy, Wiggins, & Cooper (Eds.), 2013) に掲載されたWRDの事例

Deacon, A. による Grace の事例

実は第1章の初めに登場するGraceの事例は、第2版の第3章に掲載されているAnne Deaconによる同じ事例である。被虐待に関する記述が第2版よりも若干詳しい、という程度の違いはあるが、GraceがThのDeaconの指に触れる、読者として息が止まりそうな瞬間の記述は殆ど著書と同じであるので、本論文ではその事例の紹介は省き、2つ目の事例から紹介する。

Ralph, K. による Tony の事例 (第1章)

私は7年前、介護職員として働き始めた。Tonyに会ったのはその1か月後だった。Tonyは30代半ばの男性で脳性麻痺を患い、重篤な学習困難を抱えていた。コミュニケーションは手や視線によって行い、声が出るのは満足している時か苦しい時だった。タッチもTonyのコミュニケーションの一つだった。Tonyは握手が好きだったが、緊張したりイラついている時は親指をもう一方の手で捻じ曲げようとするということもあった。

次第にTonyとの距離が近くなると、Tonyが私とのやり取りの中で強い親密の情や緊張感を出していることにあっと気づくことが増えてきた。Tonyは食事を楽しみにしている。なので、食事の時間は人と交流するのにとてもいい時間である。食事の後に私にハグしようと手を伸ばしてくることもよくあった。ハグは特別な意味があった。変に聴こえるかもしれないが、Tonyのハグは本当に純粹で、単なるハグとは思えなかった。Tonyが情を表す行動はほかにもあって、それはハグ以上のものだった。例えば床におもちゃを置いて遊んでいると、時々私と目が合うのだが、Tonyは私を見つめ続け、その視線を離そうとしなかった。これもまた単なるア

アイコンタクトとは思えなかった。2台のパソコンの間でスワップファイルを作って、情報なりデータを交換しているみたいに思えた。どの“情報”を“スワップ”するのかと言われてもうまく言えないが、Tony との間では常に感謝や温かさ、愛や絆に非常に近いものを共有していると感じていた。その“交換”こそ“純粋なコミュニケーション”だと私は思った。あるいは、これは“深い関係性 relational depth”と呼ばれているもののことだ、と思った。ある時のことは特によく覚えている。ある夜のことだった。私は Tony の笑い声で目が覚めた。笑い声で目が覚めること自体は珍しいことではなかった。Tony はベッドから出て何か遊べるものがないか、と探すことがあったからである。私は Tony の部屋に入った。床に寝転んでいるのだろうと思って。ところが、何とベッドで寝ていたのである。じゃあ、何を笑ってたんだろう？ と私は思った。普通なら自分の部屋に戻って寝るところだが、その時は Tony に見つかってしまった。Tony は肘をついて横たわり、まだ笑っていた。私を見つめ、手を差し伸べてきた。これは、こっちに来て、という Tony ならではの表現だった。私は Tony の手を取り、ベッドの横に跪いた。その時点で私ももう笑っていた。ヒステリー状態にある人に寄り添うのは何と楽しいことだろう。数分の間、私たちはそのまま笑い続けた。その時の私はもう彼の介護職員ではなかった。私たちはその時間、本当は寝ていなければならなかったが、そんなことは問題ではなかった。翌朝私たちは罰金を喰らうとか、そんなことも問題ではなかった。私たちの笑いはそのうちに、笑い以上のものになっていった。お互いの中で、ある一部分を共有するような感覚になっていった。あの時のことは今振り返っても、彼のあの強い生命感がよみがえってくるのを感じる。あの時、Tony からは強いエネルギーが吹き出していた。ちょうど、カーテンの割れ目から差し込む太陽の光のように。Tony は普通、気分が特にハイな時にはもっと関わりを

求めてきた。例えばハグしようとしたり、ベッドから起き上がろうとしたり。しかし、この時はそういうことがなかった。横たわって笑いながら私の手を握り、ただ嬉しそうにしていた。あの時、ある時点から私の笑いは、ヒステリー状態にある Tony を見て楽しくなって笑う、というのではなく、ただ Tony と共に笑うようになっていた。Tony が私に、彼の体験世界を感じさせようとしたのかもしれない。そして、そう感じるようになった私を、Tony は有難く感じていたように思える。10分ほど経っただろうか、私たちの笑いは次第に収まった。私たちは互いに目を見て笑った。“純粋なコミュニケーション”という上述の考えが浮かんだのは、私たちが互いに見つめ合っていたその時である。今思うに、笑いは私たちの旅の一部だった。笑いが止まり、見つめ合った時、私は分かった。私たちはようやくオアシスに辿り着いたんだと。そのうち、Tony は眠りにつき、私は部屋を出て自分のベッドに戻った。

あの時を振り返ってみて、あのやり取りで何が起こったのかを言い表そうとしても言葉が見つからない。はっきりしているのは、Tony と私は相手に対してお互いに温かさを感じ、良さを分かり合っていたことである。あの時、どんな考えが私の中で動いていたか言葉に出来ないが、それは、その時、私が“その流れに入り込んでいた”(I am 'in the moment') からだろう。その流れが起こっている時、私は自分に何が起こっているかと意識して考えようとするのではない。もし、それをしたら、その流れは突然終わってしまうだろう。

大事なことを記しておく。Tony と私のやり取りでは、上に述べたような力強いことがいつも起こっている訳ではない。Tony がその気になってないこともあるし、私になってないこともある。そういう瞬間が起こるにはどちらもプレゼンスの状態になければならない。もう1点指摘しておきたいのは、こうしたやり取りがいつも“気分の良い (positive)”ものになるとは

限らない、ということである。例えば、Tonyが私の目を押さえて泣き、その悲しみが私に伝わってきたこともある。結局、私たちは共に泣いていた。しかし、今思い返すと、あれも治療的な体験だったと私には思える。

Kerr, J. による Claire の事例

資格を取得後1年して私は地域のがんサポートセンターに立ち寄り、カウンセラーを雇用する気はないかと尋ねた。数年間のホスピスでのボランティア経験を経て、がん患者の支援の仕事をしたいと思うようになっていた。有難いことにその事務長は私の提案に耳を傾けてくれ、数週間後には私はそこでカウンセラーの仕事に就いていた。

私の最初の仕事は夫を亡くしたClが次の人生に足を踏み出すまでの数か月間の、そのさまよいの旅に付き添うことだった。そして、それが私のWRDの初めての経験にもなった。私たちのカウンセリングは12カ月にわたり、全部で24回の面接を行った。私たちの関係には初めから特別な雰囲気があり、それはその後も何度となく起こった。Claireはオープンで言語化の能力のあるしっかりとした50代半ばの女性である。サポートワーカーと話し合った末に私たちの施設の相談センターにやってきたのだった。私に時間を無駄遣いさせたくない、と言いながら。彼女の夫は2年間、がんの治療を受けていたことがあったが、治療は上手くいき、終了していた。ところが、彼女がカウンセリングを開始する数週間前に夫のがんが再発し、治る見込みがないことが判明した。そのショックは大きかった。数週間のうちに病状は悪化したため、家族の誰も事態の深刻さについていけなかった。夫妻は家族の絆を大事にしようとした。6人の子どもはClaireに頼り切っていた。ホスピスに毎日のように面会に行き、家事をこなし、フルタイムで仕事をしていたClaireであるが、負担は膨らんでいった。

初回の面接でClaireは今の状況を話してくれ

たが、聴いていた私は深い悲しみを感じ、同情を禁じえなかった。自分は何とかやっている、とClaireは思っていた。Claireが私に語ったのは、仕事と面会、家族や友人との付き合い、夫が突然亡くなった時に自宅に迎える準備、これらを取りこぼすことなくバランスをとりながらやっている、ということだった。私はこの女性が抱える事態の大きさに押しつぶされそうな感覚を感じ、愕いていた。彼女は思っていた。確かに今は苦しい、だけど自分は何とかやっている、がんに罹っているのは自分ではない、と。深く心を揺さぶられた私はそっと彼女に尋ねてみた。「あなたは何かやっているんですね。そして、みんなをサポートしているんですね。だけど、私は、あなたをサポートしてくれる人は誰がいるのだろうか? と心配になるんです」。数分ほど、彼女は何も言わずに私を見つめていたが、そのうち涙が頬を伝ってきて、泣き始めた。

私も目に涙がうかんだ。私はじっと座っていた。動くことでClaireの気持ちの流れを妨げたり止めたりしたくなかった。涙が収まった彼女はにっこりとほほ笑んで、「初めてよ。私が泣いたのは。ありがとう」と言った。私も微笑みを返ししながら「それならよかった」と言い、私たちはそれから数分間、心地よい沈黙の中で座っていた。親密な気持ちをこのように共有したことは、言葉にならないほど力づけられるものだった。そして私たちの間に繋がりを感じたように思えた。彼女が部屋を出てからも、私は力づけられ、高ぶっているのを感じた。それはClaireが置かれた状況を考えると不適切なものであるが。この沈黙の時間を思い起こしていた時、これはRDの瞬間だったのではないか、という考えが浮かんだ。後にスーパービジョンを受けた時、私はRDがこんなに早い段階で起こり得ること、しかも初回面接で起こり得ることに驚いた。

それから数週間、Claireは夫に対して怒りや不満を感じるようになった。こんなことを思っ

を患っていることや死につつあること、一人で痛みを抱えながら自分（Claire）から離れつつあること、自分を一人寂しく残していくこと、彷徨わせていることに対して、である。私はこれらの気持ちのどれも、何ら判断を加えることなく、迎え入れた。苦しい状況にいる Claire であるが、私は寄り添いながら、彼女は前向きに生きる自分なりの道を必ず見つけるだろうと信じていた。そのうちに彼女は最も内側にある感情に触れることが出来るようになった。そこから彼女は次第に地に足をつけて、自分自身を一層受け入れるようになった。

第7回目の面接だった。数日前に Stephan が亡くなった、と Claire が伝えてきた。その前の週には治療に対していい反応が出ていたので、あと数か月は持つだろうと思っていた。想定を外れた展開になったショックは大きかった。Claire が夫との最後の時間を語っている時、私は全身を耳にして聴いていた。私たちの間のやり取りが普通よりだいぶ遅く感じられ、全てがピンと高まっている感じだった。私は心理的にも情緒的にも私の全身で Claire に寄り添おうとした。それは RD での出会いだった。私は、自分にも深い悲しみとショックがあることを伝えた。彼女は私の傾聴の姿勢に感謝し、自分のうちには親戚や友人がいつも沢山来るけど、元気なふりをせずに、自分のままでいられる病院のこの空間に出来るだけ居たい、あなたと一緒にいる時、私は自分のままでいられるの、と言った。私は心が震えた。彼女が酷く疲れていることに気づいた私は、それを彼女に尋ねると、彼女は頷き、残りの10分をこのまま静かに一緒に座ってほしい、と言った。この沈黙の時、私たちの心は通い合い、私にとってはこの時間を共有させてもらえることを何とも有難く感じた。Claire のいう自分のままでいられる、という言葉は私には、RD での出会いという言葉と同じ意味に聞こえる。

Claire は悲しみを乗り越えながら、次の人生を模索しようとしているその気持ちを語って

れた。初め彼女は自分を忙しくして喪失の大きさを感じないようにしていたと言う。しかし、次第に疲れるようになり、喪失感の強さに圧倒され、外界から引きこもるようになった。電話にも玄関への来客にも出なくなった。この引きこもっていた時期にも Claire は私たちの面接には毎週通ってきた。この場所が安心して自分自身でいられる唯一の場所だと彼女は言う。私たちは深く繋っていたが、いやだからこそ、苦しみと絶望の Claire に共感しながら時間を過ごすのは私にとっても大変苦しかった。しかし私は、中核条件を提供し、彼女が自分自身でいられる場を提供し続けることは、彼女が回復し前に向かって歩み始めることを必ず支える、と信じていた。

Person-centered approach のこの原則に対する私の信頼がより確かなものになったのは、Claire が夫の遺灰を散灰するかどうかを家族で話し合っている、と私に話した時である。彼女は家族の間で意見がまとまらないことについて怒り、不満げであった。酷くイラついていた。私は共感的な応答をしたのだが、その応答には悲しみの感覚が伴っていた。その reflection によって散灰の問題の背後にある問題に彼女は目を向けることになった。実は葬儀は彼女が茫然としていた中で過ぎてしまっていたのだった。そのため散灰こそが彼女にとって個人的に大事なお別れの儀式になる筈だった。葬儀の時は子どもの面倒を見なければならぬので、お別れの儀式にならないことを彼女は分かっていた。それで、子どもたちを今度の散灰の儀式にも参加させてしまうとまたお別れが出来ない、という思いがあった。しかし、今、そのことを口に出した彼女は怒りを解き放つことが出来た。Claire はそのことを考えながら静かに座っていた。そこには落ち着きの空気があった。

私たちの間の心の通い合いは非常に密度の高いものに感じられた。私はその沈黙の中で彼女の横に座っていられることを有難く感じた。数分して Claire は静かに口を開き、この瞬間に、

何か霊的なことが起きたみたいなのよ、Stephanが本当に近くにいた感じなのよ、と言う。彼女には、穏やか(peace)という感覚が起きていた。それを壊したくないと思った彼女は面接の残りの時間を自分と一緒に座っていて欲しい、と言う。私は喜んで、そうしましょう、と伝えた。Claireは、立ち去ろうとした時、ハグしてもいい?と訊いてきた。そして“特別な時間”を提供してくれて有難う、と感謝を伝えてきた。彼女は微笑みながら部屋を去った。私はその日一日エネルギーで満ち溢れていた。このセッションはカウンセリングの不思議に私を導いた特別なセッションだった。こんなセッションを経験すると、私はセラピーのプロセスで起こり得ることに畏れを感じる。また、CIの旅の伴侶になれる幸運を有難く感じる。

Brown, C. による Leon の事例 (第1章)

私がLeonとのセラピーを始めてから3年がたつ。Leonは突然、気分が落ち、医者からうつと診断された。セラピーの初期から彼には強い緊張があった。“いい人”であるために自分自身に課している固いルールに束縛されているように思えた。自分の実際とははるかに隔たった理想を繰り返し自分に言い聞かせていた。初回の面接でLeonは、セラピーでやりたいことを全部言葉にするのは難しい、と話し、自分は尖ったようにイライラする、なぜなら、自分は人に心を開いてないし、関わってもいないし、どうしたら関わられるのかも分かっていないからだ、と言ったのだった。彼が面接にやってくるのを待つ間、私は、その時その時で程度は違っていたが、神経が高ぶり緊張するのを何度も経験した。その感情はセッションが進むにつれて次第に薄れていった。

Leonはなかなか時間通りにやって来れなかった。それでも私は彼の頑固さと、よくなりたいたいという彼の思いを尊重していたし、彼の内面はとても親切で誠実な人であるのを感じていたのでもうそういう彼が好きだった。ただし、その誠実

さは彼自身の自己否定によってぼやけてしまうことが多かった。私のそのポジティブな感情を言葉にしてLeonに伝えても良さそうに思える時は、伝えたことは何度かあったが、伝えてみても、その伝わり方はふわりと伝わる程度のものであった。私の彼へのポジティブな感情を彼が受け止めているようには思えなかった。

彼の来室を待つ私の神経の高ぶり緊張は2年間続いた。そして、RDと思える短い瞬間が訪れた。私がLeonに、あなたは非常に思慮深い、思いやりのある親切な人だと伝えた時だった。私は初めて彼の前に張られていたバリアが外れるのを感じた。束縛のない自由に流れる空間が私たち2人の間にふわっと開いた。その変化に気づいたその時、“私たちはようやく本当に出会っているんだ”と私は思った。初めてのことだった。Leonも私のその思いを受け入れているようだった(私は彼をそう感じた)。Leonはまっすぐ私の方を向いた。これも初めてのことだった。そして私の目の深くまでまっすぐに見ていた。私は体じゅうのあらゆる緊張が緩んでいくのをはっきりと感じた。そして全くオープンになって、その瞬間の自分になることを自分自身に対して許している自分を感じた。それは、Leonが私をそのままで見ると許すことであった。そのことは、Leonが私の感じているLeonのままに自分を受け入れ、その受け入れようとする彼の思いを私が心から迎え入れていることであった。

何度あつただろうか、私たち2人は共にシーンとした沈黙のなかで、防衛のない深い凝視を交わした。それは、優しさに溢れた、恐怖の全くない瞬間であった。互いに遠慮なく見つめ合い、見つめられ合った。もはやCIとThではなかった。ただ2人の人間の魂が互いに見つめられ、互いに受け入れられていた。

この体験は私たちの治療関係の力動も彼の彼自身に対する関係も変え、それは必ず大事な変化として現れるという思いが私にはあった。また、次回以後、Leonは時間に遅れずに来室する

ようになる、と確信した。

この時の詳細を私は思い出せない。ファイルには上述のメモが残っているだけである。それ以外の記憶は、その時の静寂な謙虚さの感覚のなかで蒸発していった。Leon はそれ以後、遅刻せずに来室するようになり、私への目線もしっかりしたものになり、自分自身に対して以前よりもはるかに自己否定をしなくなった。

今も Leon は気分が落ち込んだままセラピーを終えることもあるが、自分の気持ちをそのまま言葉にしてみようとする場合も出てきたし、自分の知り合いや初めて出会った人にも思い切って関わろうという場合も出てきた。私とのセラピーを終えて退室する際は必ず私に手を伸ばして握手しようとしたり、時には尊敬に溢れたハグをしたりするようになっている。以前にはあり得ないことである。

この文章を執筆している現在も私は Leon との面接を続けている。勇気を出して人に関わろうとするこの人との治療同盟の中にある有難さを今も感じながら。

Ⅲ. 若干の考察

第2版の著書の第5、6章は Mearns による強烈な展開の事例であったので、それ以外のセラピストによる WRD の事例を見るために上述の事例を紹介したのだが、ここでは省略した Deacon による事例も含めたこれら4つの事例も強い印象を残すものである。ただし、これらの事例には、Mearns の事例にはない WRD/RD の側面もあることが感じられる。WRD/RD 自体が非常に主観的な体験なので、それを読んだ私自身の感想も非常に主観的なものになることは承知しているが、今後研究を行い、臨床実践に役立てようと思えば、その印象も言葉にして残すことが必要であると筆者は考えている。そこで、主観的であることを承知の上で、筆者なりに感じた、Mearns の事例とは異なると思える側面、また定義（上述）に必ずしも当てはま

るかどうかわからない、と思える側面を試みにまとめてみて、今後の研究につなげたい。

以下は、必ずしもこれら4つの事例全てに通じる訳ではないが、ある程度共通していると思われる特徴である。

1) 自他の融合：Tony の事例では、Th は気が付いた時には、Cl の笑いに乗せられたようにして笑っている。Th の意識を越えて、Cl の体験の流れに融合していたと言えるだろう。Grace の事例では Cl が流すはずの涙が Th の目に浮かんでいて、それに Cl が気づいたのだった。Th が Cl の体験に入り込んでして先取りしていると言える体験である。Claire の事例の、「私たちは深くつながっていたが、いや、だからこそ、苦しみと絶望の Claire に共感しながら時間を過ごすのは私にとっても大変苦しかった」という Th の Kerr の言葉は、Cl の体験を Th が自分のこととして共感する深さ故の苦しさであり、共感的理解の延長上にあるとはいえ、これも自他の融合と言えないことはないだろう。Leon の事例でも、Leon の来室を待つ Th の神経の高ぶりと緊張が続いたが、これも神経が尖ったようになっている Cl の体験が乗り移ったかのようにも解釈できる。Leon の事例でそれ以上に自他融合を感じさせるのは、Th が Leon に「あなたは非常に考えの深い〜」と伝えた時に、彼の緊張のバリアが外れ、共に出会っていると Th と Leon 双方に感じられる体験が起こっている。これは、Th が主観的に感じていた体験であるが、Leon も Th の目をまっすぐに見つめるという初めての体験が起こっているため、Th の恣意的な解釈とばかりは言えないように思われる。全体に自他の融合がこのように起きるのは、Claire の場合のように Th の共感的理解の努力の結果であろうが、共感的理解というよりも「自他の融合」と言う方が適切な意識変容的な体験にまで高まっている、と言えるだろう。ロジャーズがプレゼンスについて論じた場合（1986/2001）も、中核条件が高度に備わっている場合に、Th の内面の魂が Cl の内面の魂にまで届く、という

意識変容の状態が起こると述べている。

これらは自他の融合が起きた体験であるが、それとは別に自他の融合的な体験を求める動きが見られる。Claire や Tony、Leon の事例では CI がハグという身体の一体化を求めている。Grace や Claire の事例では、近くに座ることや指に触れることなど、身体接触という自他が一体化する体験が非常に治療的な体験として起きている。これらは自他の融合を求めて起こす動きと言える。

自他の融合は、著書に掲載された Mearns の 2 つの事例には必ずしも見られないが、Mearns 以外のセラピストでは自他の融合の生起、あるいはそれを求める動きが WRD/RD の特徴の一つと言えるだろう。

2) CI-Th という関係の枠組みの溶解：Leon の事例では「もはや CI と Th ではなかった。ただ 2 人の人間の魂が互いに見つめられ、互いに受け入れられていた。この体験は私たちの治療関係の力動を変え〜」という事態が起きている。これは Th と CI という役割を離れた「ただ 2 人の人間」の相互作用が起きていることを示している。また、Tony の事例でも、もはや自分は Tony の介護職員ではなくなっている、というくだりがある。このように、CI-Th という枠組みがなくなっている瞬間が起これり、次第に続くようになることが WRD/RD の特徴の一つであると言えるだろう。Th が自己一致が進み、RD のなかにいると、ただ個人として居る、という体験が進行中の体験全体の大きな部分を占めることで、CI-Th という関係の枠組みが溶解するのである。ただし、枠組みが溶解するだけであって、Th という意識までが溶解するのではない。

3) CI との関係に居られることへの感謝：Claire や Leon の事例では Th が CI と居られることに温かく感謝をしている。職業としての Th という感覚が大きければ、この感謝は生まれまいだろう。Claire の事例で、「〜繋がりを感じるが生まれたように思えた。彼女が部屋を出てからも、

私は力づけられ、高ぶっているのを感じた」と書いているのは、Th が「Th」としての感覚ではなく、個人としてそこに居る感覚が大きいからであろう。

CI も Th も、関係の中に居る、ということに対して、「CI」や「Th」という役割を越えたところで感謝が起こる、ということは、Mearns & Cooper が論じるように、人は、他者との出会いの不思議さ、有難さを欲しており、また人との出会いを求めるのは、ヒトという生物の基本的な欲求である、ということであろう。

本論文では、WRD/RD の、著書の Mearns とは異なる研究者による事例文献からその特徴を探ってみた。少なくとも筆者なりの概念化では Mearns の事例とは異なる特徴が見出された。また、WRD/RD を PCT に特有な現象として考えるならば、PCT の今後の新たな展開のためにも概念化を目指した研究を続けるべきであろう。

文 献

- Brown, C., Deacon, A., Kerr, J. & Ralph, K. (2013). Meeting at relational depth in therapy: the lived encounter, In Knox, R., Murphy, D., Wiggins, S. & Cooper, M. (Eds.), *Relational depth: New perspectives and developments* (pp.175-184). Palgrave Macmillan/Springer Nature.
- Mearns, D. (1996). "Working at relational depth with clients in Person-centered therapy", *Counselling*, 7(4), 306-311.
- Mearns, D. & Cooper, M. (2005). *Working at relational depth in counselling and psychotherapy*, London: Sage.
- Mearns, D. & Cooper, M. (2018). *Working at relational depth in counselling and psychotherapy*, 2nd Edition, London: Sage. 中田 行重・斧原藍(訳)(2021)「深い関係性」がなぜ人を癒すのか パーソン・センタード・セラピーの力, 創元社.

Rogers, C. (1986). A client-centered/person-centered approach to therapy. In Kutash, I. & Wolf, A. (eds.), *Psychotherapist's Casebook*, San Francisco: Jossey-Bass, pp.197-208. (カ

ーシェンバウム・ヘンダーソン編 (2001) 伊藤博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集 (上), 誠信書房, 162-185.)

